北区コミュニケーション・モア　12月例会

「手話でつなぐ文化」

手話エンターティナーとして

那須　映里　氏
手話エンターティナー／役者

12月15日(日)10時～11時45分、東十条区民センター第1ホール（A・B）において、那須映里氏をお招きし、「手話でつなぐ文化」と題して、ご講演いただきました。
会員28名、非会員47名、合わせて75名の方にご来場いただきました。

★自己紹介★

1995年東京都生まれ。デフファミリーとして育った。仕事は、手話翻訳(日本語から日本手話に翻訳する)や国際手話の指導の他、聴者とろう者が協働できる企画を運営している。テレビやメディアにも出演中。

１・聾学校から日大法学部へ、そして社会人に…高校まで筑波大学付属聾学校に通う。学校は厳しくて宿題が多かった。キュードスピーチでは会話に遅れることもあり、口話を使っていたが、疲れるので学校に行くのが嫌になったこともある。「社会はもっと厳しく差別もある」と親に諭された。日大法学部新聞学科に入学。法学部を選んだのはろう者の権利を保障してくれると期待していたから。難聴者はいたが、ろう者は私が初めてだった。大学の授業ではノートテイクを利用した。ろうの世界のことを伝えたり、手話を広めるためには報道に携わるのがよいのではないかと考えて、新聞学科に進んだ。聴者とコミュニケーションをする時は、手話だけでは周囲が困ると担任に言われ、声をだしてみたがうまくいかず、会社に入ってから、やっと手話だけでコミュニケーションができるようになった。

２・世界をとびまわる…ベトナムへは何度も行き、ベトナムの手話も覚えた。この国で働きたかったので仕事を探したが、たくさんの会社から断られる。「聞こえないから危ない」「電話ができないから駄目」と。ろう者と聴者が対等に生きられる社会を作りたいと、フロントランナーズの留学でデンマークへも行った。外国でいろいろな体験ができたことが今日の私を作っていると思う。

３・ビジュアル・バーナーキュラー（ＶＶ）について…帰国後は手話エンターティナーになった。ＶＶはパントマイム、身振りもOK。ろう者、外国人にもすべての人がわかるように表現することが基本。ＶＶを考えた人はバーナード・ブラッグ氏。リズム、マイム表現、スピード、擬人化、ロールシフト、３Ｄ、カメラワーク、ズームなど多様なルールに基づいて表現する。アメリカで開催されたＶＶフェスティバルで、私は「広島の原爆」と「ヤマトタケル」を表現した。アメリカでは原爆投下が戦争を終結させたと正当的にとらえている人がいるが、私は原爆の悲惨さをVVで訴えた。わかってもらえたと思う。

パフォーマンスとして「おたまのかなしい話」「海の中にいるイメージ」をVVで表現していただきました。

４・「手話で楽しむみんなのテレビ」について

字幕だけを見ても分からないことがあるから「手話で楽しむみんなのテレビ」が放送されている。メディアはマイノリティの生活を変える一手にもなる。聴者とろう者が楽しめるエンターティメントを作り、もっと手話を広めていきたいと考えている。